

## 《関西サロン2010年6月例会報告》

【日 時】2010年6月5日（土）18:00

【会 場】Supporter's Field

【テーマ】英国フットボール案内 Footie Life

【演 者】島田佳代子（ライター）

【参加者（会員）11名】伊藤禎治、賀川浩（ライター）梶田孝史（スポーツネットワーク大阪）黒田和生（ヴィッセル神戸）貞永晃二（フリーランス）高原渉（宝塚FC）根本いづみ（フリーライター）本郷由希、本多克己（シックス）宮川淑人（枚方FC）室田真人

【参加者（未会員）23名】赤尾修（アミティエ）雨堤俊祐（ライター）池田義文（意岐部FC）伊田翔平（京都大学）井上（鴻池東SC）悦勝公豪（阿武野高校）岡俊彦（神戸FC）奥井尾崎正章（セレゾン）金川幸司（セレッソ大阪）北川貞和（神戸FC）金晃正（セレッソ大阪）慶越雄二（JFA）小西ゆかり（クリエ）佐々木弘（木曜SC）須田みゆき、田中基、近田邦彦（交野FC）永田淳（ライター）平田智丈（宝塚FC）船戸勇一（脇田SC）ベン・メイブリー（ライター）山下寛雄（枚方FC）

【報告書作成者】本多克己

注1) ★は2010年度会員名簿完成後の新会員（名簿には掲載されていない）

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## 英国フットボール案内 Footie Life

島田佳代子（ライター）

\*\*\*\*\*

宮川さんに何週間も前から、笑いにうるさい関西人から笑いを取れるのか、まさか笑いなしでやるのか、とプレッシャーをかけられているのですが（笑）、これまで内容でプレッシャーをかけられることはあっても、笑いということでプレッシャーを受けたのは初めてです。今日はイングランドについてお話をさせていただきます。もう何度も行っておられる方やイングランド生まれの方もいらっしゃるのですが、そんな中で私がイングランドのフットボールを語るのには恥ずかしいところもありますが、よろしくお願ひします。



今、ご覧いただいているのは「I LOVE 英国フットボール」と書かれています。2002年に私が本を出した時にソラミミストの安斎肇さんに描いていただいたものです。先月「英国フットボール案内 Footie Life」という本を出しまして、これは英国サッカー案内としているのですが、通常はイングランドのサッカー、イングランドのフットボールというようにイングランドと言われるのですが、私は最初の本からイングランドではなく英国としています。それはなぜかと言うと、ここにいらっしゃる方は皆さんご存じのことと思いますが、イングランド代表はあっても英国代表はないんですね。

それは過去の歴史などもあって、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4協会が存在するので、イングランドとしてしまうとスコットランドなどのことを書いたときに怒られるかなと思って、あえて全てを含めて「英国」としています。アイルランドも含めてしまっているので、アイルランドの人が知ったら叱られると思うのですが（笑）



これはロンドンのコベントガーデンにあるパブです。カウンターがあって、奥の席のところにはスリーライオンズというイングランド代表のシンボルが飾られています。イングランドでは中世からボールを蹴る、フットボールというものは存在していましたが、各地、各学校で異なるルールで行われていました。そのため、学校や地区同士で試合をしようとしたときにルールが異なるので、前半はこちら

のルールで、後半はこちらのルールでなどというようなこともあって、不都合が生じてきました。1863年にこのパブに関係者が集まってルールを統一しようということで、FA、フットボールアソシエーションが生まれました。このパブはもちろん今でも営業していて、奥の席は人気があってランチやディナータイムには埋まっているのですが、写真を撮らせてくださいとお願いすると快く応じてくださいます。「龍馬伝」が人気で私も見ているんですけども、1863年という年号が結構出てきます。ちょうど龍馬の時代で、まだちょんまげの時代に、世界で最初のFAが誕生していたというのを知ると、歴史を感じます。

次は、ナショナルフットボールミュージアムと書いてありますが、フットボールの博物館です。マンチェスターに移転の話などもあるようですが、現在はイングランド北部の町、

プレストンというところにあります。交通の便も良くて、マンチェスターやリバプールから1時間程度で、最寄りの駅からは徒歩では無理でバスに乗っていくのですが、なぜこんな辺りなどところにあるかという、リーグの最初のチャンピオンがここのチームだったからです。中には日本の協会から送られた兜のようなものもあつたりします。英国のフットボールの歴史と、世界のフットボールの歴史の両方を見ることができて、フットボールの起源として日本の蹴鞠も紹介されています。イングランドではなくて、日本がフットボールの母国か、なんて話になってしまいますが。

イングランドは銅像を作るのが大好きで、(ベンに)好きですよ？

ベン： そうですね。ぼくはまだ作ってもらってないけど。(笑)

まだですね(笑)。いたるところにあるんですよ。戦争がらみのものとか、フットボール関係のもの。フットボール選手ならまだ存命の人でも生まれ故郷や活躍した街に銅像があります。ある時期に銅像の写真を撮りまくっていたら、はまってしまったのですが、あまりの量の多さに驚かされました。フットボールミュージアムはプレストン・ノースエンドというクラブのスタジアムに併設されていますが、スタジアムの中はこんな感じです。昔イングランドでよくみられたテラスという立ち見席なのですが、私が見学に行った直後に取り壊されることになっていて、その前のシーズンでは客も入れずに使用していませんでした。なぜかという皆さんご存じの通りで、1989年にヒルズボロの悲劇というのがあってFAカップの準決勝のノッティンガム・フォレストとリバプールの試合で、シェフィールドのヒルズボロ・スタジアムに試合前に多くの観衆が押し寄せて、当時はチケット管理もいい加減だったのか、フェンスに観客が押し付けられて96名が圧死という事故があったためです。それ以降、イングランドでは立ち見席は禁止、自由席もありません。その事故があったのが1989年で、20年目にリバプールで行われた追悼式ではスティーブン・ジェラードが当時10歳だった一番若い犠牲者だったのが仲良しのいところで、それが彼のフットボール人生に大きな影響を与えた、という話をしていました。

これは、宮川さんが応援する、マンチェスター・ユナイテッドのオールドトラフォードというスタジアムです。私が初めて行ったころは、確か48000人程度の収容人数だったのですが、改修に改修を重ねて、外観も全く違うものになって今では76000人収容になっています。こちらは私が応援しているマンチェスター・シティの、昔のスタジアムです。メインロード・スタジアム。いまはないです。

次は、ヨークシャーのガーフォースタウンです。ガーフォースタウンやロンドン郊外の「ボークラムウッド」のように、プレミアリーグから数えると7部、8部にあたるリーグでもそれ



ぞれのスタジアムを持っています。2000、3000 人を収容できるクラブを持っているところもあります。これは、「ボーラムウッド」の練習グラウンドです。3 面、4 面のピッチがあって、もちろんこういうチームもトップチームの下に下部組織をきちんと持っています。私が驚いたのは、7 部とか 8 部とかいうクラブで、当然プロでは

なくて選手たちは他の職業を持っていて、夕方から練習して週末に試合を行っています。今は円高なのでレートが異なりますが、当時聞いたところでは一番活躍している選手だと、こういうレベルでも月に 20 万円ほどもらえるらしいです。うらやましいですね。日本だと上から数えて 7、8 部だとグラウンドを借りるために自分でお金を出すようなレベルかもしれないですけどね。

これは、聖地ウェンブリー・スタジアムです。私が最初の本を書いたときは、聖地ウェンブリー在住という肩書がほしくてウェンブリーに住んでいました (笑)。ただ、私がイングランドに住んでいたのは 99 年から 2007 年なので、その大半はウェンブリー・スタジアムは改装中でした。スタジアムの建設も遅れに遅れていました。昔のウェンブリーはツインタワーと言って、二つのタワーがシンボルだったのですが、今はビッグアーチと言って屋根の上に大きなアーチがあります。南アフリカにあるスタジアムでアーチのところから見学できるのがありますね。このウェンブリーはアーチに登れるわけではないので、南アフリカに負けちゃったかなと思います。このスタジアムが完成してから私も何度か見に行きたいと思ったのですが、聖地はイングランド代表の試合や F A カップの準決勝、決勝などの試合しか使用しないんです。プロのサッカー選手にとってもこのウェンブリーのピッチに立つことは簡単なことではないですし、ファンとしても試合数が少ないので見に行きたくてもなかなかチケットが取れないんです。しかし、何とか F A カップの決勝チケットを手に入れて行きました。それが、この写真です。イングランドはどこも専用スタジアムなので、トラックもなく近い距離で見ることができます。私が見たのはカーディフ対ポーツマスというちょっと渋い試合だったのですが、それでも当然満員です。最初に 1863 年に F A ができて、リーグ戦が始まったのですが、リーグよりも F A カップの方が先にスタートしていて世界最古のカップ戦です。

これは、同じくウェンブリースタジアムの近くで撮った写真で、ポーツマスのサポーターです。次はケンブリッジ・ユナイテッドのサポーターですが、いろんな年齢の方が写っていますね。最近、日本のサッカージャーナリストの方とお話をしていたのですが、J リー

グのファンの年齢層が高くなりすぎていることを危惧されていました。私もJリーグを見始めた時は10代だったのが今では30代になりましたし、年齢が上がっていくことは悪いことではないと思うんです。ただ、若い人を連れていかなければいけないのですが、私がイングランドに暮らしてうらやましく思ったのはおばあちゃんやおじいちゃんが率先して孫を連れていくんですね。今はプレミアの試合だとチケットが買えなくなってしまっていて、子どもを連れていけないという話もありますが、地方のチームであればもちろんチケットも入手できますし、どこの街にも必ずフットボールクラブが存在するので、何世代も一緒に応援している姿はうらやましいな、と思います。

これもロンドンのケンブリッジファンの人たちですが、パブの前で中に入り切れなかった人が道まであふれていますね。この人たちがなぜ大騒ぎをしているかといえば、上のリーグに昇格するためのプレーオフの決勝に進むことができました。プレーオフの決勝はウェンブリーで行われます。大きな試合でしか使用されないウェンブリーで下部リーグの選手、関係者、ファンにとってはウェンブリーに行けるというのは夢のような話です。

サポーターの写真をご覧いただいておりますが、私がイングランドのフットボールが好きというによく言われるのは、フリーガンは？ということです。ただ、この腕にもタトゥが入



っているおじさん、しかも耳にはマンチェスター・シティのピンバッジが刺さっていて、一見ちょっと怖そうですが、タトゥはシティのマスコットだったり、ちょっと恥ずかしいんですけどね。ワールドカップドイツ大会で私は日本代表とイングランド代表の試合を中心に観戦していましたが、イングランドサポーターの人だけが脱いでるんですね。イングランドの人は95年に初めてマンチェスターに行った時に、一番ショックだったのは上半身裸の人がやたらと多いんです。下は一見会社員の普通のズボンなのに上は裸なんです。なんでこんなに脱ぐんですか？

ベン： 夏だけじゃなくて冬でも脱ぎますよ。ニューカッスルという北の寒いところの冬の1月の夜のゲームで雨が降っていてもみんな脱いでます。わけわかんないです。

そうです。しかもマンチェスターのオフィス街とかなんです。オフィス街で会社員が上半身裸で歩いているなんて見たことないので、最初は目のやり場にもこまってしまったんで

すが、いまでは慣れてきて、こういう人たちと一緒にサッカー観戦をするんですが、この2006年のドイツ大会は一人で観戦旅行をしていて、他の国のサポーターたちとも話をして、私がイングランドファンだと言うと、なんでイングランドはあんなに脱ぐんだ、と言われてやはりおかしいんだなと思い、ちょっと観察をしました。せっかくレプリカシャツを着ているのに、脱いじゃったらもったいないなと思って、裸を見てみると胸にちゃんとスリーライオンズのエンブレムが入っているんですね。結構、胸や背中にスリーライオンズのタトゥー入れている人が多くて、脱いでもいいんだ、と感心しました。この子たちはまだ裸じゃないんですが、将来裸になる予備軍だと思って撮って、私の本でも使おうと思っていたのですが、ズボンのチャックが開いていて、編集部の人と相談した結果、上半身だけで使うことになりました。

イングランドに暮らしていて、何百試合と見ていて、プレミアから下部のアマチュアレベルまで。よくフリーガンは怖くないですか、とか危なくないですかと言われるんですが、一人で、時にはミルウォールというロンドンでは危ないとされているクラブの試合を見に行ったこともありましたが、トラブルに巻き込まれたことは一度もないです。フリーガンというのはフットボールファンはとまったく別で、ただ純粋にフットボールが好きでタトゥー入れたり大騒ぎしちやったりする人まで日本などのスタジアムにはいないので、フリーガンに見えちゃうのかなと思いました。この人たちの騒ぎ方があるんですが、

#### 【動画】

これは優勝したわけでもなんでもなくて、試合の何時間も前からこうしてパブの前で騒いでいる人がいるんです。普段のリーグ戦でもこんなノリで電車やバスに乗ってくるんです。東京で都バスに乗っていて、こんな感じで大勢サポーターが乗ってくることはないので、あちらの騒ぎ方は日本とはやはり違います。それを全く見慣れていない日本人が見たら、やはり恐怖を感じるかもしれないですが、純粋なフットボールファンです。

イングランドでは、何か暴力行為をしてしまうと、そのスタジアムに立ち入りできなくなってしまいますので、各スタジアムにはいくつもカメラが設置されていてブラックリストに載っている人が入ってくると、つまみだされてしまいます。よく1863年にパブでF Aが誕生したという話をしましたが、その時に手を使いたいと主張した人たちもいて、その人たちはF Aには参加せずに1871年に世界初のラグビー協会を作っています。ラグビーは中流階級以上のスポーツで、サッカーは労働者階級と言われていますが、ただ最近サッカーはチケットの値段が高騰してしまった、また外国人の観戦客が集まるので、昔から観戦していたイングランド人がチケットを買いにくい状況になっていて、今のイングランドでは、40代のそこそこ稼いでいる人がサポーターの中に多くて、サッカーは労働者階級のスポーツと言いきれなくなっていますし、逆にラグビーもアマチュア主義だったのがプロ化されたり、ワールドカップで優勝するなど、とても人気が高くなっています。ラグビーが急速に

大衆化を進めていて、両方のスポーツを見る人も増えてきています。上の階級の人でサッカーもラグビーも好きという人はいますが、労働者階級でラグビーだけを見るという人は聞いたことがないです。私はラグビー本を書いたこともあってワールドカップも見に行きましたが、サポーターもあまり違いがないです。唯一の違いは上半身が裸か裸じゃないかだけ。ラグビーのワールドカップは夏ではなくて秋なので、肌寒いから着ているのかもしれないです。

この銅像はリーズ・ユナイテッドのスタジアムにあるものです。イングランドでは 100 年以上の歴史があるので、今強豪と言われているチームがずっと弱小だったこともあるし、逆に弱小チームがここ数年でビッグクラブになっていることもあります。どのクラブもいい時と悪い時を経験していると思いますが、一番私にとってショッキングだったのはリーズ・ユナイテッドというクラブで、私がい英国に住み始めた 2000 年代は最も輝いているクラブでした。UEFA チャンピオンズリーグのベスト 4 にイングランド勢としては唯一進出していたようなクラブが、選手の移籍でお金の使い方を間違ったり、年棒が急激に高騰したりして、破たんして下部のリーグに降格してしまいました。最近ではニューカッスル・ユナイテッドというビッグクラブが降格したりしています。下のリーグに降格していてもサポーターは常に応援を続けていますし、中には試合を見に行かなくなる人もいますが、すごいな、と思ったデータは、このリーズはポイントはく奪などのペナルティを受けたこともあり、下部に落ちてしまったのですが、その時にどれだけのサポーターがスタジアムに足を運んでいたか、というデータです。まず 2008、2009 年のデータですが、プレミアリーグの平均観客数が 35630 人です。その下の 2 部にあたるチャンピオンシップの平均は 17875 人で、最高はダービー・カウンティで 3 万人以上です。その下に 3 部にあたるリーグ 1 があって、平均は 7504 人ですが、リーズはそこに降格していても 23000 人以上を集めていました。先日、宇都宮徹壺さんとお話をしているときに、J リーグの観客動員が落ち込んでいるという話を聞いて、さらに J2 だと 7000 人台という話を聞くと、この日本の人口の半分のイングランドの 2 部、3 部でも 2 万、3 万入るといのはすごいなと思わされます。これは、日常生活でも実感することが多くて、マンチェスターに住んでいるときは、サッカーファンの友達が多いなかで、女の子でフットボールには興味はないわ、と言っていた人もいますが、ただ話をしていると嫌いなはずなのによく知ってるんですね。両親やお兄さんが好きだから嫌でも情報が入ってくるとかテレビをつけたらニュースで流れているとか、フットボール嫌いは暮らしにくい国だと思います。

これは、北アイルランドのジョージ・ベストです。2005 年に亡くなりましたが、ベルファストという街の出身です。何度かベルファストには行ったことがありますが、テロの街という印象が強くて、はじめ観光で北アイルランドに行った時も、ベルファストは空港を使うだけにしよう、と思って市内には入らずに地方に行ったりしていました。次に行った

時も爆弾テロの怖いイメージがあって行けませんでした。初めてちゃんとベルファストの市内に行ったのはジョージ・ベストの葬儀の時でした。じっくりとベルファストを歩いてみると、街中いたるところで兵士が銃を持っていたり、爆弾物から逃げまどう人が壁画に描かれていたりするなかでジョージ・ベストの壁画もいくつかあって、ホッとしました。葬儀に参列した時にも感じたのですが、私から見ればプロテスタントもカトリックもキリスト教だと思うのですが、北アイルランドに生まれた人にとってはどちらかなのかということはすごく重要なことで、今でもピースラインと言って、プロテスタントとカトリックの住む地域が壁で区切られていたり、このエリアは100%プロテスタントしかいないとタクシーの運転手さんが教えてくれたりしました。それがジョージ・ベストの葬儀では、カトリックの象徴であるセルティックの旗を持っている人もいて、ジョージ・ベストはプロテスタントなんだけども、カトリックもジョージを応援した、というように、この国を一つにしたジョージ・ベストはすごいな、と感動しました。ジョージ・ベストはベルファストの空港の名前にもなっていますね。英国に人の名前のついた空港は3つあるそうで、このベルファストと、リバプールのジョン・レノン空港、ノッティンガムにあるロビンフッド空港です。あと、お札にもなっています。葬儀には10万人以上と言われる人が参列していて、そんな人が日本にいるかな、と思いました。スタジアムに行くと露店がたくさん出ていて、昔の選手のユニフォームが売られています。日本だったら釜本さんとか、なかなか売られていないですね。そういうのを着ている人もいるし、うらやましく思います。

次は、アイルランドのクローク・パークというスタジアムです。アイルランドで最大級の8万人収容です。私は数年前までこのスタジアムのことは知りませんでした。ダブリンには何度か試合を見に行っただけで、いつもランズダウン・ロードというスタジアムで、仮設の席みたいなのもあるボロいスタジアムだったのですが、ワールドカップ予選でポルトガルとやっていたりするので、これが一番大きなスタジアムなんだな、と思っていました。しかしこんなもっと立派なスタジアムがダブリンにありました。なぜこのスタジアムを知らなかったかというと、昔ここで血の日曜日と言われる事件があって、試合中に英国軍が発砲して14人の犠牲者を出しました。それで反英国主義ということで英国のフットボール、ラグビーは一切禁止して、アイルランドの独自のゲーリックスポーツ専用のスタジアムとして使われてきたようです。ただ、そのフットボールで使われているランズタウンロードというのが老朽化が進んでいて建て替えが必要ということで、その間に限ってこのスタジアムがフットボール、ラグビーに開放されました。アイルランド人の友人と話していると、イングランド人を嫌っている感じの人も少なくなくて、マンチェスターに住んでいるとき、アイルランド人と部屋をシェアしていて、よくイングランド人の悪口も聞いていました。スタジアムが開放された時には問題が起これませんでした。それは皆フットボールが好きだから政治のことは関係ないということのようです。フットボールは偉大ですね。



99年から2007年までイングランドに住んで、自分にとってフットボールとは、と考えた時に、フットボールがなければたくさんの友人もできなかつただろうし、イングランドに住むこともなかつたわけで、イングランドの生活では一番大切なものでした。日本では身近にサッカー好きがいなくて、イングランド時代はよかつたなと思います。日本でもサッカーファンを増やしていきたいと思います。

会場： カーディフはなんでチャンピオンシップに入ってるんですか？

島田： 私も気になっているんです。レンジャーズとセルティックがプレミアに入る入らないとずっと言われているんですが入っていないくて、ウェールズのチームは入っているんですね。どうしてでしょう？

ベン： それは昔からです(笑)。1992年までウェールズにはトップリーグがなかつたんです。カーディフ・シティ、スウォンジー・シティ、レクサムとニューポート・カウンティがイングランドのリーグに入っていました。リーグを作ろうという動きもなかつたです。だから昔からです。ウェールズカップというのがありますし、リーグはできましたがカーディフやスウォンジーとはずいぶん力に差があります。

島田： 私も英国の友達に聞いたんですが、皆適当な答えしか来ないんですよ。

今日は育成に係わっておられる人も多いので、イングランドの育成について触れておきます。プレミア以下94チームがありますが、数年前の為替レートで各チーム2800万円を協会から育成の資金として支給されるそうです。それをどう使うかというのは、マンチェスター・ユナイテッドや、リバプールのようなビッグクラブだと、それに自分で上乗せしてユースの育成にあてるのですが、下部のクラブだとそんなお金はないので、その2800万円で運営していくそうです。2800万円って大きいですよ。最近はその割り当てをなくして、各チームの判断でやっていっては、という意見もあるようです。即戦力が求められて、プレミアを見ると外国人だらけなので、いくら育成しても即戦力が必要なので、外国から選手を取ってきてしまう、するとユースの選手が軽視されるというのも現状です。このアカデミーもそうですし、全国各地にある、セミプロのクラブでもU-18とかU-12などのチームを持っています。こうして見ているとイングランドはプレミアだけではなくて、それを支えている組織がしっかりとあってアカデミーにしても下部のリーグにしても、そこで選手を育てると同時に、レフェリーもコーチも必要で、優秀な人材を育てる場があるのはすばらしいと思いました。

私の友達が草サッカーをやっていたらスカウトされて、FA カップにも出場するようなチームから1試合 50 ポンド出すと言われたそうです。そしてユニフォームも支給するからと。その時に、この国には1万円だとしてもサッカーでお金をもらったことがある人は何割いるだろうと考えました。

会場： 2年後にロンドン五輪がありますが、英国代表はつくられるのでしょうか。

島田： ロンドンで開催されることが決まってから、ずっと議論されていて、ロンドンで開催されるのに英国代表が出場しないのはどうか、という声もあり、イングランドとしては自分たちが主導権を握るのは間違いないので結成しようという動きもあるようでファーガソンを監督にという話もあるようです。ラグビーだと合同チームがあってアイルランドも入ってますね。なぜサッカーではダメなのかとラグビー博物館の館長さんに聞いたら、ラグビーは大英帝国が支配していた国を中心に広がっていて、海外遠征をするときに植民地には負けられないという意地があって合同チームをつくったという説明でした。サッカーでも見てみたいですね。

賀川： 1910年代までは合同チームがあって、オリンピックにもチームを出しています。アマチュアだからよかったけども、今はプロになっているので難しいところがあると思います。